

# 徳川みらい学会第5回講演会

## 「関ヶ原の戦いと小山評定」

静岡大学名誉教授 本多隆成さん



徳川みらい学会第5回講演会「関ヶ原の戦いと小山評定」を平成28年12月16日、静岡市葵区のみずぎんホール・ユニアで開催しました。講師は、本多隆成静岡大学名誉教授。講演を前に、栃木県小山市の大久保寿夫市長があいさつし、小山市民劇団「開運座」が小山評定を再現した劇を披露し、会場を盛り上げました。

本多隆成さんの講演要旨は次の通り。

### 家康の政治的立場が強化

なぜ小山の評定が重要なのかといえば、関ヶ原の戦いの帰趨を決したからです。

慶長3年8月18日に豊臣秀吉が死去したことが、関ヶ原の戦いの契機です。特に慶長4年3月3日に家康と並ぶ五大老のメンバー前田利家が死去すると、石田三成は福島正則ら七将に襲撃され、佐和山城に退去しました。

7月には上杉景勝、8月には前田利家を継いだ利長が帰国し、上方に

残った大老は家康、毛利輝元、宇喜多秀家の3名になります。五奉行は、9月に浅野長政が失脚して、前田玄以、増田長盛、長束正家の三奉行となります。家康の政治的立場は強化され、9月27日、大坂城に入りました。

慶長5(1600)年2月頃から上杉景勝に謀反の疑いがかげられ、家康は上洛陳謝を命じましたが、上杉家の執政直江兼続が嫌疑について弁明・反論する返書を送ったため、家康は5月末に上杉氏討伐に踏み切りました。

6月16日、家康は大坂城を出て江戸に向かい、7月2日に江戸に到着。会津への出馬を7月21日に定めました。

### 三成の拳兵と小山の評定

ところが7月12日に増田長盛から家康の家臣に「石田三成と大谷吉継が拳兵した」ことを伝える書状が届けられ、19日には家康もこれを知りました。家康は予定通り出馬しましたが、24日に下野国小山に着いたところで、先発していた秀忠ら呼び返し、25日に小山の評定となりました。

小山の評定では、福島正則が口火を切つて家康への支持を表明し、西上して三成らを討つことを決し、山内一豊の懸川城の進上などを受けて、東海道の諸城は徳川方に接收されました。

最近「小山の評定はなかった」という趣旨の論文を光成準治氏、白峰旬氏が発表しています。しかし、当時の徳川家康書状、黒田長政自筆書状、浅野幸長書状、宮部長熙書上の内容を検討すると、7月25日に諸将が小山に召集され、小山で何らかの談合・評定進言があったことは疑いないことと言わなければなりません。

### 関ヶ原の戦いは豊臣対豊臣

小山の評定後、翌26日に豊臣系諸大名が三成らの討伐のために西上していききました。

関ヶ原の戦いは、徳川対豊臣の戦いと考えられてきましたが、豊臣対豊臣の戦いの様相を呈します。家康は五大老の筆頭として豊臣の公儀を背負つて6月に大坂城を出馬しています。三成も大坂城の三奉行を巻き込み、毛利輝元・宇喜多秀家連署の書

状で諸大名の動員を行うなど、豊臣の公儀を背負つて戦います。

家康が江戸城を出馬したのは9月1日。14日には美濃・赤坂に着いて岡山の陣に入りました。家康が「佐和山城を攻め落とし、上方に向かう」という情報を流すと、西軍はそれを阻止しようと、大垣城を出て関ヶ原に布陣。東軍も関ヶ原へ軍を進めます。秀忠が率いる3万8千人の徳川氏の主力軍は合戦に間に合わず、家康は豊臣系諸大名に依拠して戦わざるをえませんでした。

9月15日、東軍7万人、西軍8万人が関ヶ原に対峙。小早川隊が西軍の大谷隊に突入したことをきっかけに西軍は総崩れとなり、「天下分け目の決戦は、東軍の圧勝で終わりました。

論功行賞として、①780万石の没収高のうち425万石ほどは豊臣系大名を中心に大幅に加増し、②220万石ほどは譜代の武将たちに加増・転封し大名に取り立て、③135万石ほどは徳川氏の蔵入地とし徳川氏の蔵入地を倍増し、④豊臣系大名は遠隔地へ転封しました。

3年後、家康は將軍となり、徳川公儀の幕藩体制を確立していきます。豊臣系諸大名が家康につくことを表明した7月25日の小山の評定の意義は大きかったといえます。

(文責：静岡商工会議所企画広報室)

個人・法人会員を随時募集しています。皆さまのご入会をお待ちしております。  
 〈お問い合わせ〉 徳川みらい学会事務局 〈TEL〉 284-9660 〈HP〉 [徳川みらい学会](#) [検索](#)